

ふれあい雪谷

平成16年
もみじ号



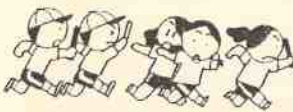
(石川台 渋谷 武次さんの作品)

「母校の思い出」

先日久しぶりに友人数人と、昔話を肴に一杯やる機会を得ました。酔う程に話は昔に昔にと小学校時代へと向かっていました。

今の石川台中学校辺に昼間でも薄暗い竹藪あり、なぜか真赤に錆たレールが敷かれ、半分壊れ古びたトロッコが置かれていた事。それを動かし遊んだ事、また八幡神社では防空壕のあった崖に向かい手作りの弓矢で的当てをし、大木の上に小屋を造ったりと楽しく遊んだ事など。私など真冬の呑川に誤って落ち首まで漬かり川底のぬめりの為に上がれず、大声で「たすけてくれ」と近所の人を呼び助けてもらった事など色々と思い出を語り合いました。

私達は、戦後のベビーブーム世代で、小学校時代は60人学級でした。体の大きな私など教室の後の板壁を背に勉強した良く居眠りをし注意を受けたものです。



当時の学校では競争心を持つ事を教わった様に感じられます。連合運動会、野球大会と学校対抗戦、また学校内でクラス対抗と生徒も先生勝つ事に一生懸命努力した事を思い出されます。

ガキ大将で勉強の少々苦手な私の活躍の場でもあった訳です。弱きを助け強きを挫く、ちょっと格好の良い言い方ですが昨今流行の陰険ないじめなど当時はなかったのもガキ大将がいたからかもしれませんね。また争うというのは助け合うという事でもあると、自然に当時のこどもは身につけたかもしれません。

卒業後半世紀を迎えようとしておりますが小学校時代の良き仲間が今でも良き友としておつきあいさせていただいている事に感謝しております。

(石川台 金子 義一)

「編集後記」

今年位猛暑が続いたことはありませんでした。暑い日が続く中、熱い五輪大会が開催されました。テレビ中継にくぎづけとなり、睡眠不足になられた方もいらっしゃるでしょう。

この夏、お体を弱めた方は、はやく健康を取り戻し、読書・食欲の秋を迎えてください。

毎回、多数の方が原稿を快く引き受けて下さり、編集委員一同大変感謝しております。

今後ともよろしく願います。
(希望 坂丘 米川 實)

【発行】わがまち大田雪谷地区推進委員会
【編集】ふれあい雪谷編集委員会
【連絡先】雪谷特別出張所
大田区東雪谷四一三二
電話 二七一九一五二 七
【発行日】平成十六年十月一日
通巻第五十六号

母校の思い出 ⑱

サークル紹介 25

手芸

東雪谷会館で毎月第二木曜日午前10時から、東雪谷東中自治会女性部が古布を使って小物作りの講習会を行なっています。



見学や作品を作っている方々とのおしゃべりだけでも大歓迎です。是非一度のぞいて見て、気に入ったら参加して下さい。お待ちしております。

(東中 女性部)

私の健康法 ⑰

平成十二年十二月と翌年二月に往原病院で二度にわたる手術を受けまして、本年七十二の年男を無事迎えました。一病息災の糖尿病と三十八年間のおつき合いを大切にしています。

禁煙してから二十年を経過しますが、お酒はほどほどに。ストレスを生んだり、溜まったりする事は不可として自分に課しております。また散歩は一万歩が日課ですが、さすがに今年の夏は半減になってしまいました。

「人間万事塞翁が馬」と言いますが、健康法は他人まかせでは難しいですね。飲・食・趣味・運動・何れをとっても同じではない事が、この



お嫁さんとお義母さんが揃って参加する等、とても暖かく優しさのあるサークルです。

ホームページ

<http://www.city.ota.tokyo.jp/nishi/yukigaya/index.htm>



(小池 天田 正昭)

エネルギー資源と地球環境

夕暮れが早くなり、そろそろ火の恋しい季節になります。

昭和30年代、暖を取るのに炭の火鉢にこたつ、風呂は薪か石炭でした。

昭和40年代には、灯油が冬の暖房に、現在は夏冬使用できるエアコン（電気）が、安全性と利便さで主流になっています。直接使用することが少なくなった炭、石炭、石油など化石燃料ですが、日本の全エネルギーの80%以上を賄っている現実、今も変わっていません。

日本における平成10年度の原油消費量は、約3億9千万キロリットルで、一日あたり国民1人が1リットルの牛乳パック8.5本分を使っている計算です。

世界における状況も同じで、産業革命が始まった1850年から百年間で消費してきたエネルギーを過去15年で使ってしまった。このまま使い続けると無尽蔵と思われた石油はあと41年、天然ガスは63年、石炭は218年で枯渇します。それだけ人間の活動が活発な証拠ですが、反面エネルギーを消費した結果発生する二酸化炭素（温室効果ガス）が増えて、大気の上昇、地球温暖化の環境問題を起こしています。このまま温暖化が続けば、気象のバランスが崩れ、大雨や洪水、干ばつ等の異常気象が起きます。極地の氷が溶け海水が膨張して海面が上昇し、太平洋上の島国ツバルの様に国土が水没するなど、深刻な問題が出てきます。

エネルギー消費と地球環境は、表裏一体なのです。限りある資源を効率よく使用することで、地球環境も変わります。

これらの問題を少しでも改善させるために、新エネルギーと呼ばれる14種類のプロジェクトを、国が推進しています。次世代の新エネルギー（太陽光・風力発電・燃料電池・クリーンエネルギー自動車等）に、大いに期待したいものです。

資源エネルギーと環境問題は、コストの点と関心の薄さから軽視されがちですが、最近原油の価格が暴騰を続け30年前の石油ショックの再来を予測させるような状態が続いています。今こそ当時の経験を生かし、その再来が無い様に1人1人の心掛けが必要です。

私たちが出来ることは、無駄な電気を使わない配慮と、この問題に1人でも多くの人々の関心を持ってもらう事なのです。

資料（おおた環境福祉展2004より）
（小池 安藤 政治）

洗足池雑感

昭和22年の夏、小学校6年生で疎開先の長野県から現在の地に移って来た。

天竜川の河童だった私が、今度行くところは海に近いかと父に聞くと、海には遠いが近くに池があるという。

移って早速行ってみた。池は思ったより大きかった。

ちょうど遊びにきていたG1が、飲み終えた缶を池に投げ込んでいたが、池の真ん中には到底届かなかった。

その後、池に小エビがいることを知り、30センチ程の「よつで」を作り、メリケン粉を餌に空き缶一杯程釣っておかずにしたことがある。

しかし、同級生のI君やO君が泳いで叱られたこともあって、洗足池では、その後泳ぐことはなかった。

それから数年程して「あおこ」が大量発生し、悪臭もひどく池は死んだようになり、散歩も楽しくなかった。

その後、いつ頃からであったろうか、池の浚渫と水の浄化が始まり、更に周辺地域の下水道と環境の整備も進められて池は徐々に甦ってきた。嬉しい限りである。

最近では孫と一緒にボートを漕ぐのが楽しみで、また桜の季節には妻と2人で洗足流れから桜山まで散歩して、人込みになかに、ワンカップで一杯やるのを恒例としている。

これからも更に良い公園にしていだくことを期待している。

（笹丸 浜辺修二）



美しい環境づくり⑬

生活環境をエンジョイする

私の住んでいる仲池上はかつて大田区内の典型的な準工業地帯、しかし交通の便も追い風になってか、今では新しいマンションでいっぱいです。

私達のマンションは一番先に建ち、他にマンションという建物はありませんでした。敷地に恵まれ、四季折々に花を咲かせ、また実をつける草花、樹木がいっぱいです。

春はソメイヨシノに始まり、八重桜へと、梅雨どきにアジサイ、秋には白いヒガン花が敷地いっぱいに咲きほこります。また柿がたわわに実を付ける。初冬にはケヤキや区指定の保護樹プラタナスの太木が落ち葉をかさね、かわってまっ赤な椿が花を付け始め、年明けには水仙へと移って行く。環境的にはとても恵まれたマンションだと思います。

またクリスマスの季節には玄関、中庭のケヤキの太木に幻想的なイルミネーションがとまります。

でも、これらが悩みの種になる事もあります。敷地内の遊び場が、一部中高生のかくれた遊び場に利用される事があるからです。よい子、悪い子、普通の子というテレビ番組もありましたが、いつの世も同じようです。きっと一過性の行為かと思えますので、環境にやさしい青年に育つことを期待しつつ見守っていきたいと思います。

（上池上 関）



自治会リレー随筆

軍隊は運隊だ！

だいぶ以前のこと、私は高齢者のアルバイトをしたことがある。休憩時間に仲間のひとりが「軍隊は運隊だヨ」とポツリ言った。「？」私には初耳だったのでその意味をたずねた。彼は昔を思い出す様に話した。

それによると兵隊は命令によっては隊が全滅するか、逆に生き残るかが決まるもんだ。兵士には選択の自由が無いと言った。私にも思い当たることがあり同感した。

昭和19年の前半ごろ、私は同期生のN君と実習生として5千トンのタンカーに乗船していた。南方の原油を内地に運んでいた。下船は断念していた。何ヵ月かたったころ、ボルネオで私達に帰国の電報が届いた。海軍の学校へ入学するためであった。

結局、N君が残り私が一足先に日本へ帰ることになった。帰還といっても喜べない。制海権が失われてきた我が国は、航路の要所で米国の潜水艦隊に待ち伏せ攻撃を受けていた。私は不安がいっぱいで下船、タラカン島の守備隊に仮入隊、内地帰還の便船を待った。

他方、N君の船は航空燃料を満載しハルマヘラ島に向かった。間もなく米潜水艦の魚雷攻撃を受けて護衛艦が沈没タンカーは幸い魚雷不発で、全速でマニラ湾へ逃げ込んだ。しかし、マニラでも米軍の空襲を受けタンカーは沈んだ。N君とは再び会うことが無かった。生存者は乗組員51人中1人だけだった。戦争で沈んだ我が国の客船、貨物船は7千隻以上、殉職した船員数は6万人以上といわれる。

（南雪谷 小林 友博）



俳句

口笛や秋の星座をつなぐ糸

揺椅子に秋の日脚を惜しみけり

秋の風安楽椅子のくぼみかな

新刊書ページページの秋の声

秋惜しむ山脈あわく描き足して

（笹丸 垂井 道夫）

お詫びと訂正

七月一日付あさがお号にて左記の訂正がありました。

「目下山の氷」の四行目と「編集後記」の六行目

正 約二百八十年前頃 誤 三百四十年

サークル紹介の回数 誤 23

正 24

誤

23

この情報誌は古紙100%の用紙を使用しています。

